

叢 纂

大戦後公表されし重要な國際關係史料について

大村 作次郎

筆者は曾て本誌第十三卷第四號に於て、同題目の下に世界大戦後の公表外交文書の重要なものについて略述する處があつた。然るに、其後文書集の公表は愈々盛んであつて、頗る重要なものを多々加へるに至つたので以下それを述べて前稿を補定したい。

前稿に於て紹介したものは大體次の如きもので、重複の嫌ひはあるが、連絡上其の書名を記したい。

先づ、セラエヂ事件後の大戦勃發直因に關するものとして、大戦直後各國政府より公表されしそれら不完全なる Farbbücher、次いでカウツキイ文書集 Die deutschen Dokumente zum Kriegsausbruch. Berlin. 1919. 及びオー

- ストーリアの Diplomatische Aktenstücke zum Vorgeschichte des Krieges 1914. Wien. 1919. 續いて大戦前國際外交史料としては、ドイツ外務省文書集 Die Grosse Politik der Europäischen Kabinette 1871—1914. Berlin. 1922—1927. ヘルギイ外務省文書集 Belgische Aktenstücke 1905—1914. Berlin. 1915. 及び Zur Europäischen Politik 1897—1914. Berlin. 1919. (以上の二つを合併したものが Die Belgischen Dokumente zur Vorgeschichte des Weltkrieges 1885—1914. 9 Bde.)、ロシヤのイスマルスキイ文書 Der diplomatische Schriftwechsel Iswolskis 1911—1914. Berlin. 1924. 及び Un Livre Noir: Diplomatie d'avant-

Guerre d'après les documents des archives russes. Paris. 1922—23. 及び B. von Siebert の Diplomatische Ak-

zum Juli 1918 eingegangen sind. Berlin. 1918.

tenstücke zur Geschichte der Ententepolitik der Vorkriegsjahre. Berlin. 1921. (より完全なるものが Graf Benckendorfs diplomatischer Schriftwechsel. 1928.) 更に雑誌の形を取つて發表した史料集(Krasnyi Arkhiv)も頗る重要で、これは幸ひ 1923—28 の二十四部が九大西洋史研究室に揃つて居る。但しロシア語である爲に其の利用は困難である。勿論特に重要なものは概ねドイツに於て紹介された。オーストリアよりは貴重なる Phibram の Die politische Geheimverträge Österreich-Ungarns 1878—1914. Wien. 1920. フォン・ストリヤの 佛露同盟・伊佛協定・バルカン戦役に關する三個の黄書、イギリスよりは外務省文書集 British Documents on the Origins of the War 1898—1914. London. 1926—、最後に 獨露兩皇帝間の交換書簡集數種。

猶ほ、前稿記述漏れのものには、ロシアの Dokumente aus den russischen Geheimarchiven soweit sie bis

さて其の後公表されし重要な外交文書集としては、既に公刊繼續中なりしイギリス外務省文書集が、現在第六卷まで出て居る。重要な貢獻としては、學者間に盛んに論議されし一八九八—一九〇一年の英獨同盟交渉問題に關する文書の提供によつて、從來 Grosse Politik のみに依つた研究を大いに訂正し、該同盟提議はイギリス側より公式に出されたものでないとの主張を生むに至り

第二卷(The Japanese Alliance and the French Entente) に於て、日英同盟及び英佛協商成立の經過を始めて明かなる形に示し、第三卷(The Testing of the Entente 1904—05)はモロッコ問題に關するもので、屢々論議さるゝ英佛秘密商議に關しても若干の史料を提供して居る。第四卷(The Anglo-Russian Rapprochement 1903—7)は、これ亦始めて英露協商交渉の經過を詳細に知らしめたもので、第五卷(The Near East 1903—9)に至つて文書數は俄然として増加し、マケドニア問題を詳細に示し、更に

大戰後公表されし重要な國際關係史料について (大村)

第十七卷 第二號 二七九

ボスニアの危機をも扱つて居る。第六卷 (The Anglo-German Tension 1907—12) は、大戦勃發の主因の一つたる英獨海軍問題を、約六百の豊富なる文書を以て示したもので、これが研究は頗る興味深きものである。一九一二年の“The Haldane Mission”は、Grosse Politik 其他の史料を合せ用ひることによつて、此處に始めて完全に知り得るに至つたのである。因みに、最近のアメリカ史學雜誌の報ずる處によれば、最近政治史の世界的權威たるオーストリアの Priham 博士が、近々 Oxford University Press での England and the International Policy of the Great Powers, 1871—1914. を公けにせんとのことである。鶴首もて待つべき著である。因みに、イギリス文書は、既に H. Lutz の手によつて、イギリス外務省認定のドイツ譯が出来て居り、又 Grosse Politik の抜萃譯が E. T. S. Dugdale の手によつてイギリスに於て四冊本となつて出て居る。

次に重要なものは、フランス外務省文書集刊行の開始である。この事たるや、既に前稿に於て筆者が切望した處

であるが、今や早くも實現されてこれに過ぎる喜びは無い。抑々、大戦前外交の關係者の殆んど凡てが、フランス現在の政界に有力なる地歩を占め居る状態に於て、客觀的なる文書集の公表は頗る至難なることであつた。然るに、ロシア方面の露骨なる文書公表により、「修正派史家」の活躍は益々旺盛となり、大戦責任論に於けるフランスの立場は次第に不利と成つたので、フランス政府としてもこれが對抗上、いつ迄も沈黙を守り得ざるに至つた。斯くて一九二八年一月二十日の法令により、“Commissioin de publication des documents relatifs aux origines de la Guerre de 1914—1918” が組織され、多數の著名なる史家、文書官、外交官を其の委員とし、此の委員會の手により、一九二九年以後文書發行の事業が行はれることとなつた。文書集は三部に分れ、第一部は一八七一一一九〇〇、第二部は一九〇一一一九一一、第三部は其の後世界大戦の勃發に至る。本文書集の公表に對しては、ドイツ史家の一泰斗故 H. Delbrück をして、大戦前外交の直接關係者を多數加へし委員會の手による

此の文書公表より何を期待し得べきか、と冷笑せしめたが、委員長たる Charley の序言によれば、文書の選擇は全く歴史的考慮の下にのみ行はれ、重要な證據の隱蔽を防ぐ爲に凡ゆる注意を拂つた由である。本書の特に、獨、英のそれと異なる點は、問題別によらずして、日附順に文書を載録した事で、學術的見地よりして、後者がより優れて居る事は明白である。故にかの *Grosse Politik* のフランス譯に當つては、之を日附順に改めたさうである。而かも巻頭にそれと *Table méthodique* を附して、問題別の目録を掲げて居るのは頗る親切なる方法である。

文書は勿論大部分外務省文書館より取られたが、陸海軍兩省及び植民省のそれも利用されたと云ふ。現在に於ては未だ、第一部第一卷、第二卷、第二部第一卷、第二卷、第三部第一卷、第二卷、第三卷が公表されて居るに過ぎない。但し其の内筆者の手許に未だ到着しないのが若干ある。種々なる貢獻はあるが、特に、一八七五年のドイツ、フランス間の "*Krieg-in-Sicht*" 事件を中心とする兩國關係に就ては大いに明かにされ、一九〇二年の佛伊

祕密協定に就ては、先のフランス黃書は頗る僅少なる史料を提供するに過ぎなかつたが、今や始めて其の詳細が世に明かとされた。これ筆者の大いに期待する處である。更に第三部第二卷以後は未だ入手し得ないが、ポアンカレ時代を覆ふもので、これ最も論議多く、ドイツ其他の「修正派史家」の攻撃頗る盛んなる時代であるから、第三部の完成は、大戰前外交史研究者の凡てが大なる希望と緊張とを以て待つ居る譯である。既に A. Rosenberg の手によつてフランス外務省認定のドイツ譯が作られて居る事は、今やドイツ史界も此のフランス文書公刊を重視して來た事を示すものである。

次に重要なのは、オーストリア文書集である。一九二六年四月オーストリア首相 Rauek は、大戰前史に關する文書の公表を、*Kommission für neuere Geschichte Österreichs* に依頼する事に決し、此の頗る重要な事業は直ちに五月より着手された。オーストリア外務省文書館に於ける一九〇八一—一九一四年の文書は、實に約三十萬頁に及び、これより重要なものを選択するのは

頗る困難なる仕事である。此の選擇はキーン国立文書館長 L. Bitner, キーン大學教授 A. F. Pilbriam, H. Spik, 及び Uebersberger の四人の手によつて、分擔して行はれ、其の選擇された文書は更に Bitner, Uebersberger によつて精細に整理され、此處に一萬一千二百の文書を有する貴重なる Österreich-Ungarns Aussenpolitik von der bosnischen Krise 1908 bis zum Kriegsbruch 1914. Wien, 1930. 9 Bde. の成立を見るに至つた。一九〇八年以後、所謂三國協商、三國同盟對立の緊張せる時代の國際外交に關し、此の詳細なる文書集が如何に多くを教めるかは言を俟たない處である。大戦前バルカン外交史は後述のロシア文書と相俟つて此處に始めて其の全裸身を吾人に示すに至つたのである。斯の一九一九年の Rotbuch 公表以來、大戦當時の外相ヘルヒトルドの責任は頗る重視され、大戦原因論研究の世界的權威にして、比較的獨逸側に好意を有せるアメリカの S. B. Fay 教授すら、ヘルヒトルドの對セルビア政策を最も非難した程であるが、本文書集の公表は、彼に對する苛酷なる批判を

若干修正せしめ、彼の政策を是認すべき點有りとの主張を見るに至つた。本集の公刊は、勿論史界に甚大なるセンセーションを起し、各國の多くの雜誌、新聞が之を紹介したが、筆者の眼に觸れたのは、H. Uebersberger, Die österreichische Aktenpublikation. (Europäische Gespräche. März 1930) 及び E. von Glaise-Horsteman, Das österreichische Aktenwerk über die Vorgeschichte des Weltkrieges. (Berliner Monatshefte. Jan. 1930). 此の文書集完成の歴史とその内容の大體を述べたものである。本集を充分利用した詳細なる研究は未だ見ないやうであるが、F. Steve, Die Tragödie der Bundesgenossen. München. 1930. は本文書に基けるオーストリア外交の概觀のやうで、只今註文中である。猶ほ、雜誌其の他に於ける研究に就ては、Berliner Monatshefte が紹介して居るが筆者の見たのは、K. Schwendemann, Grundzüge der Balkanpolitik Österreich-Ungarns von 1908—1914. (B. M. März. 1930) の及び、他は B. E. Schmitz, The Bosnian Annexation Crisis. (Slavonic Review. Dec. 1930.

March, June 1931.)は重要な研究の如く、入手したく思つて居る。但し著者は反獨塊の代表的學者であつて、大戦の直因を詳論せる最近の彪大なる著『The Coming of the War 1914. N.Y. 1930.』は、豊富なる最新文書——それは多く獨塊に有利であつたが——の試練を経て、猶ほ且つ反獨塊的主張を公けにした、十二年間の研究の結晶であつて、一九三〇年度の Pulitzer Prize を受けたものである。其の主張の是非はとも角、自己の意見に忠實なる勇敢な態度は好ましい。勿論ドイツの Max Montgelas は敢然起つて之に應じ、Professor B. E. Schmitt über den Ursprung des Weltkrieges. (B. M. Mai, Juli, August 1931)を著して、シュミット教授に反對した。因みに、以上のオーストリア文書は、近く九大圖書館に於て購入して貰へる筈である。

次にセルビアの文書集である。セルビア政府は、大戦の直接原因たるセラエヴ問題に重大なる責任あること、次第に明かとなり來つたに拘らず、依然として其の文書館の扉を開かなかつた。然るに最近 M. Bogischewitsch

なる一個人の手により、かなり纏つたセルビア文書集が公表された。彼は曾て駐獨セルビア代理公使であつた人物で、大戦責任論の研究者として知られ、親獨的傾向をかなり強く有して居た。既に一九一九年に『Kriegsursachen, Zürich. (英譯も有り)』を公けにして、若干の秘密文書を公表し、バルカンに於けるロシア及びセルビアの策動を暴露する處があつたが、最近、自己の手中に在る豊富なる文書を蒐集して世に公けにした。これが Die auswärtige Politik Serbiens 1903—1914. Berlin. 1928—30.

3 Bde. である。第一巻が本來の文書集の Geheimakten aus serbischen Archiven と記され、四百餘の秘密文書を收めて居る。これによれば、大戦前に於けるセルビアのオーストリアに對する陰謀、之を助くる協商諸國の策動が明かとされ、大戦責任論に於けるドイツ史家の活動に更に優れたる材料を提供するものとして歓迎されたのである。第二巻は Diplomatische Geheimakten aus russischen, montenegrischen und sonstigen Archiven. と記され、全部既述の他の文書集より拔萃したものである。第

三卷は、Serbien und der Weltkrieg. なる題目の下に、大戦勃發に對するセルビアの責任を論ぜるものである。オーストリア政治史の一權威 Theodor von Sossinsky は以上のセルビア文書集を批評して、吾人は此の著作を、何等の誇張なしに monumental と稱し得、".....das Werk Bogischewitsch's stellt mit seiner mächtigen Fülle unanfechtbarer Dokumente, seiner unbeherrshbaren Wahrheitsliebe und Logik einen hochragenden Denk—und Markstein in der historischen Kriegsliteratur dar und zugleich einen durchaus verlässlichen Wegweiser in der Kriegsschuldfrage." 此等三卷を注意もて讀みし人は何人も、セルビアに對するオーストリアの罪を信じ得ざるべし、何人も、戦を欲せしはハプスブルグ帝國に非ずしてセルビア及び其の背後の協商國及びイタリアなりし事を承認するに至らん、と述べて居る。以て本文書の重要性を知るべきである。

最後に、極めて最近更に頗る重要なる公表を見るに至つた。ロシア、イタリアの文書集即ちこれである。

ソギエツト政府の手により、或は他の方法によつて、ロシアの祕密外交文書は既にかなり豊富に公けにされたのであるが、其の公表が頗る非組織的、且つ分散的であつたのは大いに遺憾とする處であつた。然るに最近の報道は此の點に關して吾人に大なる喜びを與へるものである。それは、既に一九二八年に決定されて居た、大戦前ロシア文書の系統的なる公表が愈々本年其の事業を開始するに至つた事である。此の公表は、ドイツの出版會社との協定が成立して、ロシアの原本とドイツ譯とを同時に公刊する事となり、ドイツ譯に於ては、完全なる逐字譯を爲す義務を課せられて居る。該協定は、他の國に於ける如何なる種類の翻譯をも嚴禁して居る。ロシアの原本に於ては、唯物史觀的史學者として名ある M. Pokrowski 教授を主宰者とし、ドイツ譯に於ては、O. Hoetzsch が發行者となつて居る。Die internationalen Beziehungen im Zeitalter des Imperialismus' Dokumente aus den Archiven der zarischen und der provisorischen Regierung. がドイツ譯の題目である。内容の詳細は未だ明

かでないが、既に第一部（一九一四年一月より大戦勃發に至る、全五卷）の第一卷（一月十四日より三月十三日）が公刊され、全體としては一八七八年以後を覆ふもの、如くであるが、これは未だ疑問である。筆者が此のロシア文書集を最大級の期待を以て望む所以は二つある。先づ第一に此の文書集が唯物史觀的見地の下に編纂されたことである。これは Pokrowski, Aus den geöffneten

russischen Archiven. (B. M. Nov. 1930) に於て述べられ

居る處である。第二は、ソヴェット政府の公表なる以上其處に帝政ロシアに對して何等の遠慮の存しない事である。他の文書集が多く、其の公表の動機を自國辯護に置いて居るに反し、此のロシアのものは全く反對である。帝政ロシアを非難し、攻撃する材料の多ければ良いだけ

更に大戦前列強の帝國主義的侵略政策を惡し様に云ひ得ればそれだけ、ソヴェットと政府として有利なのである。故に此の文書集が、何等の陰蔽なく、如何に暴露的なるべきかは察するに難くない。吾人は寧ろ、餘りに正直過ぎて、他の國とは逆に帝政ロシアに不利なる材料の

みを選択するやうな事はなからうかを心配する程である。とに角、本文書集完成の曉には、帝政ロシアの侵略的、帝國主義的野心、延いては協商列強の策動を徹底的に暴露し、英佛の政治家をして愕然色を失はしむるやうな材料が多々出現するものと信ずる。頗る痛快なる語で、「修正派史家」の活動は、將に一大飛躍期に入らんとして居る。本書は今註文中であるから、早晚入手し得るを楽しんで居る。

次にイタリアが、文書公表の殿りを勤める事となつた。元來イタリアは、其の政家の備忘録の公表に於ても最も僅少な國で、此の點大いに遺憾とされたのであるが漸く最近に至り、其の外交文書の公表を行ふ豫定なりと聞く。アメリカの史學雜誌の報ずる處によれば、時代を一八六一—一九一五年に取つて居るが、一八六一年から始めたのは、此の種文書集中唯一であつて、特に吾人の興味を引く點は、ドイツ、イタリア統一史の研究に新たな貢獻を爲すべき事である。書名は、*Documenti diplomatici sulla politica estera dell'Italia dalla costitua-*

zione del Regno alla guerra mondiale. 公刊の曉は勿論、獨佛のいづれかで翻譯して呉れる事とは思ふが、とに角イタリア語の勉強に掛らなければならぬ譯である。

以上述べた、諸國の文書集の内容を比較すると次の如きものとなる。

| 時 代    | 卷 數     | 文書數             | 發行年              | 文書採録法 |
|--------|---------|-----------------|------------------|-------|
| ド イ ツ  | 二七—二九   | 四十卷<br>五十四冊     | 一五六—一五七          | 問題別   |
| イギリス   | 一八六—一九四 | 十一卷<br>(七卷ニテ)   | 一九六一             | 問題別   |
| フランス   | 一七—一九   | 現七卷<br>(四卷ニテ)   | 一九〇一             | 日附順   |
| オーストリア | 二六—二九   | 九卷              | 約二〇〇             | 日附順   |
| ロシヤ    | 一八六—一九四 | 在現一卷            | 不明               | 不明    |
| イタリア   | 一八—一九   | 不明              | 未開始              | 不明    |
| ベルギー   | 一八—一九   | 九卷              | 一八五及一九元<br>(併合版) | 日附順   |
| セルビア   | 一九—一九   | 三卷<br>(本來ノ一卷ニテ) | 一九〇一             | 日附順   |

以上を通覽するに、世界大戦終了後僅か十二年餘を経過するに過ぎない今日、既に上述の如く、關係諸國の殆んど凡てより、系統的な外務省文書集の公刊を見るに至つたのは、世界大戦原因の探究に對する甚大なる關心を

明かに示すものである。歴史上の一個の問題、或は一個の時代に關して、斯くも短歲月に、斯くも豊富に、秘密史料の公表されし事は、西洋史學上未だ曾て見ない、誠に一大壯觀である。慾を云へば限りがない。先づ此の程度の公表を以て、満足なるものと見なさなければならぬ。さて、史料が完全に出現した以上、今後の問題となるべきは其の利用の點である。勿論、從來多數の學者が上述の文書を多く利用し、其の研究文献は擧げて數ふるに暇なき程である。然し、惜むらくは其の研究は多く、個々の問題に限られて居た。全體的なる著述である場合には、文書の利用が充分でない。勿論ビスマルク時代に關して、故 F. Rachtahl 教授の殘した業績 *Dentschland und die Weltpolitik 1871—1914. Bd. I. Stuttgart, 1923.* の如きは、他の凡ての史料と共に *Grosse Politik* の最初六卷を殆んど剩す所なく利用した、勞多大なる著述であつて、よしや著者のビスマルクの政策に對する根本的錯覺が存するにせよ、其の飽くなき研究慾に吾人は多大の尊敬を拂ひ、此の事業が第一卷のみを以て未完成に終つ

た事を筆者は深く遺憾とするものである。然し、ビスマルク時代は未だ史料も比較的少い。若し上述の *Materialien* の著の程度に史料を利用、引用して、大戦に至る外交史を作らんと欲せば、其の如何に膨大なるものになるかは想像すらも許されない程である。これ一個人の手の到底爲し得る處ではない。又一個人では、それが神でない以上、如何にしても、其の國民的偏見より脱し得ない。

斯くて筆者は、史界未曾有に豊富に提供された此の史料を利用して、一個の完全なる大戦前國際外交史を成立せしむる手段としては、國際的協調の力を俟つの外はないと、常に信じて居る。上述の文書集、これに加ふるに無数の備忘録——これらを完全に利用して、始めて其の全き價值を示すのである。此の爲には、各國に於ける著名なる政治外交史家を集め、之を以て一個の國際委員會を形成し、各委員それぞれ得意の部門を分擔して、これに關する既出現の史料を遍く利用して、詳細なる國際史を編纂すべきである。

勿論此の事たるや、單に筆者の空想であるに過ぎない。

其の費用の莫大なる、各國學者の協調的研究の困難なる先づ永久に空想で終るかも知れない。併し、此の空想を實現する時に於て、始めて豊富なる文書公表の價值が輝くのである。文書が幾十萬出やうとも、それが單に個々の問題に斷片的に利用されるに過ぎないのでは、誠に惜しいものである。

完全、詳細なる大戦前國際外交史の成立の爲に、國際的史學者の協調と云ふ、筆者の夢想がいつか、よしやそれに近い形に於てなりとも實現されん事を切望する。